

令和6年度入学生 A・Oさん

（１）税理士の道を目指した理由

税理士という職業を意識したのは中学の時でした。当時、数学の勉強が得意だったので、数字を扱う職種に就きたいと考えていました。親戚や中学校の先生に数字を扱う職業について相談すると、税理士や会計士という職種が挙がりました。税理士になるには何が必要かと聞いたら、「とりあえず簿記をやりなさい」と言われたので、商業高校に進学して簿記を学び、簿記検定を取得しました。そのまま税理士を目指し、ずっとその道を進んでいます。

高校の進路相談の際に、税理士や会計士になる人は大学に加えて専門学校にも通っているという話を聞いたので、最初から専門学校が良いだろうと考えて専門学校に入学しました。税理士試験には受験資格が必要なのですが、簿記検定を取得してその資格を得ました。

専門学校卒業後、一度会計事務所に入ったのですが、残念ながら1年も経たずに辞めてしまいました。これは知識不足というよりも、人にどうわかりやすく伝えるかという能力の不足を感じたためです。経営者の方や会社の経理の方に、自分の言いたいことをどう伝えるかという点に力不足を感じました。その後は、専門学校で講師をしていました。そして、30歳くらいの時に再び実務の世界に戻り、今の事務所は講師の後の2箇所目の会計事務所になります。

（２）平成国際大学大学院を選んだ理由

場所の立地です。私は埼玉県の手元の方に住んでいて、車で30km弱を通勤しているので、そのまま車で通える場所である点が重要でした。次に、コマ数ですね。私には子供がいるので、土日両方潰れる大学院だと家族と過ごす時間が短くなってしまうため、平日と土曜日に通える場所を探していました。今の住まいも仕事場も大学院も県内なので、その点も合致しました。

また、私は大学に行っていないので、「大学に行っていない人間が大学院に行っているのか」という不安がありました。入学の1年ほど前に電話で問い合わせをした際、担当者の方が非常に丁寧に親切に対応してくださったので、その対応もあってこの大学院に決めようと思いました。他の学生から、同じ事務所や以前の事務所にいた人がこの大学院を勧めてくれたという話を聞いて、OBの方が勧めてくれるというのは良い学校だなと感じ、入学後も安心感がありました。

（３）研究テーマ

現在の研究テーマは、「個人から企業への貸付金、あるいは親会社から子会社への貸付金と、租税回避行為の否認（法人税法132条）の適用関係」です。主に、デット・エクイティ・スワップ（DES）を実行した場合に、ある一定の環境下で132条が適用されるかを調べています。

このテーマを選んだ理由は、多くの中小企業の社長さんが資金繰りの厳しさから会社で個人のお金を貸し付けており、これに苦しんでいるケースが多いからです。これを何とか解消する手段はないかと考

える中で、DES などの手法を検討する場面が多くありました。そこで、その分野について研究し、知識を深めて対策を立てたいと考えました。

（４）学びの中で、最も印象に残っているエピソード

エピソードという感じではないのですが、授業を通じて得られる他の方の意見や議論の機会が非常に貴重な時間だと感じています。例えば、金澤先生の授業では、自分が作った課題に対して皆さんが必ず意見をくださいます。

また、田部井先生の授業では、模擬裁判を通じて、自分とは異なる相手の意見をその場で聞き、一緒に考え、議論できるのが印象的です。法律を読んでいると、自分の頭の中ではこうだと思えないことも、他の方が考えると違う視点で、法律はこうなっているけれどどうすればいいのかといった疑問も生まれます。本当に自分の考え以外の視点を得られることが一番印象に残っています。他の学生が発表している時には自分も意見を出さないといけないですし、視野を広げるだけでなく、話を進めていくための段取りや組み立て方も学ぶことができています。

仕事や家庭との両立ですが、税理士試験の科目を勉強するのと同じくらい、やはり時間は取られますし、大変だなと思います。周りの同級生の方々が頑張ってるのを見て、自分も頑張らなければという気持ちになりますね。

（５）今後の目標

まず、卒業できたら、仕事に集中したいです。これまで税理士試験の勉強や大学院に通うことで、どうしても仕事に割ける時間が限られていました。専門学校で講師をしていた期間があった分、私は実務経験で遅れを取っていると考えているので、他の人の２倍３倍経験しないと追いつけないと思っています。

そのため、今後はどのくらいのクライアント数を担当するかという目標もそうですが、セミナーや研修会に積極的に参加して、遅れてしまった分を取り返していきたいです。

それから、体力づくりも目標の一つです。最近は体動かしないと可動域が狭くなるのを感じるので、運動したいです。仕事にできる限り力を入れつつ、運動もしたいと思っています。

（６）受験生へ一言

この大学院は、金沢先生や田部井先生といった先生方の面倒見が非常に良いと感じています。先生方が出してくださる課題をこなしていくことで、修士論文にたどり着くようなカリキュラムがしっかり組まれている大学院だと思います。資料の集め方や論文の書き方、どういうところに視点を持っていくかなど、色々と親身になって指導してくださいます。それに答えていけば卒業できる、という体制です。

特に、私のように大学に行っていない、論文を書くのが初めてという人間からすると、初めの段階から丁寧に指導が入るのは非常に心強いです。講義の中で課題として与えられ、段階的に成長していけるカリキュラムなので、未経験の方には特におすすめできます。例えば、金沢先生のクラスでは、早い時期に与えられた判例で課題を作成するのですが、最初は戸惑っても、結局その経験が修士論文に繋がります。

テーマは違っても、調べ方や文書の作り方がそのまま活かされると実感しています。

また、田部井先生の模擬裁判は、最高裁や高裁の判決をどう読むか、各裁判所の判断はどうなっているかなど、文章を読む練習にもなります。お二人の先生の組み合わせもカリキュラムも本当に良いと感じています。